

英語の Modals 学習上の問題点

築 城 真 市

We must frankly admit that the "transfer theory", on which some fundamental ideas of contrastive linguistics are based, is currently in disrepute among many psychologists. Moreover, it might be a gross oversimplification simply to assert that prior learning affects subsequent learning, positively when the learning tasks coincide and negatively when they differ. However, we so often come across cases where structural differences and similarities between a learner's native and target languages are too obviously reflected in the way he learns the latter and uses it, that we can hardly deny the validity of the theory. The reason why the scientific and practical results of work in this field have not matched early expectations, might be found in the fact that the causes of errors were exclusively sought in this psychological aspect.

We should remember there are a variety of factors which influence the process of learning. For example, an investigation of errors reported by some teachers of English referred not only to errors based on the overgeneralization of patterns learned earlier, but also to errors based on incomplete acquisition of such patterns and failure to recognize semantic distinction. Errors of this type, some linguists argue, are often more appropriately viewed positively, as reflecting creative strategies of the learner aimed at discovering the grammatical structure of the target language. This reveals the innate competence of the learner for language acquisition, and the teacher should adapt his strategies to those of the learner.

Therefore the attribution of interference then becomes another problem, that of whether the interference represents influence from the native language or from earlier-acquired knowledge of the target language. Thus far I have made a series of investigations, taking as a basis the former, in other words, to determine what influence a learner's mother tongue will exert on his learning of English. They are intended to provide the teacher with useful information for more efficient and effective teaching strategies.

This time my inquiry will be focused on the learning of Modals in English. As the Japanese language lacks the exact counterparts of English Modals, "translation equivalence" will be used as a criterion. The items to be discussed are as follows:—

- I. Ambiguity in the meaning of English Modals
- II. Syntactic features of Modals
- III. Semantic features of Modals
- IV. Japanese "translation equivalence" of Modals
- V. Syntactic restraints on Modals
- VI. Modals and Negation
- VII. Modals and Tenses
- VIII. Quasi-modals
- IX. Verification

I. Modals の両義性

英語では次の動詞群をその形態的・統語的・意味的特性から Modals (法助動詞) と総称している。

will (would), shall (should), can (could), may (might), must, need, dare, ought to

そして Modals とその性格の一部 (主として意味的特性) を共有している次のような述語群を, Quasi-modals (擬似法助動詞) と呼ぶことがある。

be able to, have to, (had) better, be to, be going to, used to
 こうした Modals の学習に当って最も問題となるのは, その形態的・統語的特性もさることながら, やはりその意味的特性のもつさまざまな制約と, それに伴う微妙な意味のニュアンスに在る。特に Modals の持つ両義性は, 対応する事実が日本語にないため, 一層大きな干渉源となっている。

もともと Modals と呼ばれる理由は, これらの動詞群が, その歴史的過程の中で Mood (法) 的機能を確立し, その陳述する命題に所謂 Subjunctive Mood の性格を帯びさせるに至ったことに在る。例えば He-come-alone という事実を, 現実の具体的な時間形式にのせて, He comes alone. (叙実法) と表現する一方, この事実内容を一たん表象化し, timeless に捉えた反省の中で, he-come-alone と命題化 (叙想法) し, その上で,

he-come-alone は possible だ

とコメントすることが考えられる。このコメントの述語として OE の本動詞 *magan* の 3 単現 *mæg* が *possible* の意味で用いられ、

he-come-alone→may

と表現し、線的表現の必要から、所謂「補文述語上昇変形」とも言うべき心理に添って

He may come alone.

という「動詞+動詞」の形態（即ち助動詞化）を次第に確立して行ったものと察せられる。従って *may* の存在は、爾余の文の「法」性を暗示しているのである。

〈注〉 もっとも上記の発想から、命題を明示して複文でコメントする表現形式

It is possible that he (will) come alone. の方向へも発展がある。

ところが *mæg* にこのような認識的意味 (*possible*) を背負わせたものの、その本来の意味 (*permitted*) も失われることなく持続して来た。ここに英語の Modals の両義性が生ずるのである。

もともとこの両義性は意味の敷衍によって生じたもので、例えば *may* は

(本来の意味) 許されている→てもよい→ということもあり得る (認識的意味)

とつながる一面の関連を持っている。しかしその統語上の特性には大きな差が生じて、単なる語い学習の問題では片づかなくなっている。それは、本来の意味の場合は「行為主体」が *speaker* から或る種の「行為の実現」(即ち行為の存在すること) を認められているのに対し、認識的意味の場合は或る「命題」が「真である可能性」(即ち命題の存在すること) が *speaker* に認められているからである。即ち

- (1) 可能(性)の対象が *may*₁ では「行為」、*may*₂ では「命題」である
- (2) 従って意味的内容が *may*₁ では「2 項述語の読み」、*may*₂ では「1 項述語の読み」となる(詳細は後述)

ことである。

この本質的な意味上の差異が、さまざまな統語上の差異となってあらわ

れ、学習上の問題点を作っているのである。

この事情は他の modals についても変りはない。例えば can はOE, MEの cunnan (=know) の1, 3単現直説法から発して

(本来の意味) 知っている→できる→あり得る (認識の意味)

と敷衍され、ここでも「能力」(主体が行為する能力)から「可能性」(命題が存在する可能性)へと大きく変移している。

とりあえず Modals の両義を下表のように一覧しておいて先を急ぐことにする。

〈注〉 爾後の文例に於てはそれぞれの Modal がどちらの意味で用いられているかを明示する必要がある時は may₁, may₂ のようにその本来の意味には1, 認識の意味には2を小さく語尾に付して示す。時には総称的に Modals₁, Modals₂ も用いる。

	本来の意味	認識の意味
will	(主語の)意志, 特性/習性	未来, 予測性
shall	(話者の)意志	(shallは「英」)
can	能力, (状況による)許可	(理論的)可能性
may	(話者の)許可	(事実的)可能性
must	(話者の強制による)義務	(事実的)必然性
oughtt (o) should	(論理的な)義務	(理論的)必然性
need	必要	
dare	敢行/大胆さ	

II. Modals の統語的特性

英語の Modals は、本動詞群と著しく異なった形態的、統語的特性をもっている。学習上の視点からは次の4点が重要であろう。

1. 主語との間に「数および人称の一致」がない。

He must be there at ten.

* He musts be there at ten.

即ち述語として、本動詞のもつような 3 単現形態がないことである。

2. 疑問文・否定文に「do の支え」がない。

Can it can be true?

* Does it can be true?

尚「強調の do」も用いられない。

* It does can be true.

3. 原形動詞を従える。

He will **have** his own way in everything.

普通「動詞+動詞」の形式が持つような、to 不定詞や分詞・動名詞を従えることがないのである。

He wants **to have** his own way in everything.

He has **had** his own way in his school life.

* He will **to have** his own way in everything.

4. 定動詞形しかない。

* He doesn't like **musting** study hard.

* He used **to can** run fast.

同じ助動詞と呼ばれる be, have にも非定形はある。

He doesn't like **being** made to study.

が、Modals にはそれがないのである。そしてこの事実は Modals の最も特殊性の濃い部面となっている。

こうした外的特性を重視して、Chomsky の (拡大) 標準理論に立脚する人たちは、Modals の性格を本動詞 (V) から独立した Aux の一構成素として捉え、次のような基底部規則により深層構造に導入する。

$VP \rightarrow Aux + VP'$

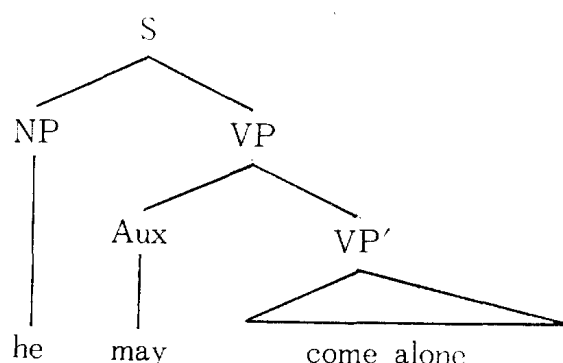
$Aux \rightarrow T (M) (Perf) (Prog)$

where : T=Tense, M=Modal, Perf=Perfective
Prog=Progressive

即ち Modals を Auxiliary の中の optional な構成素として下図のように分析するのが普通である。

(樹形図は必要部分だけを概念的に示す。)

(1) He may come alone.



そしてこの基底構造の仮定の上に立てば、上記4つの統語的特性は次のように説明することになる。即ち

1. 「3単現の欠如」は個々の Modals の特性として語彙目録で規定する。
2. 「do の支えの欠如」は Modals をその適用の対象に含んだ「主語・助動詞倒置変形」「否定辞配置変形」などの操作によって説明する。
3. 「原形動詞の後続」は上記の基底部規則により、TとVの間にMを介在させていることから、「Tとの直接的な隣接によってのみ生ずるVの語形変化（即ち時制）」が妨げられる——と説明できる。

（もっともM自身はTと隣接するので、would, could, might などの時制変化も受けるし、(Perf) や (Prog) に直接続かれて may have ~ed, may be~ing などの形態も生ずるが）

4. 「非定形の欠如」も不定詞補文や動名詞補文には生じ得ないことを、Modals の文脈素性として、語彙目録の記述に含める。

以上のように、Aux の一構成素として、Modals を一般動詞から分離する立場に立てば、その統語的特性の説明は、一応明確に出来る。この点では（拡大）標準理論の分析が Modals の外的特性を忠実に説明していることに異論はない。しかし翻ってその意味的特性に着目する時、この分析はその弱点を露呈する。

Ⅲ. Modals の意味的特性

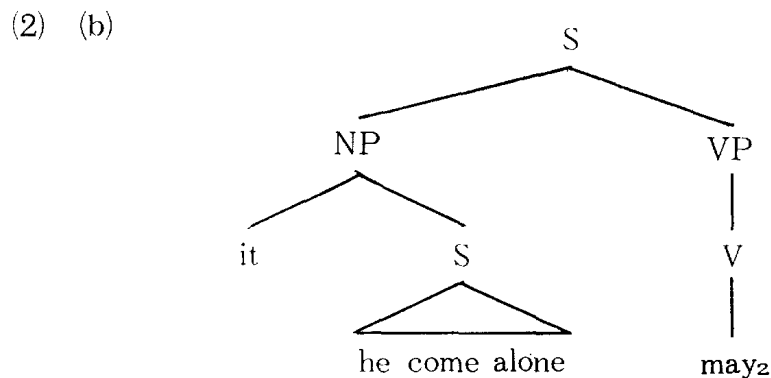
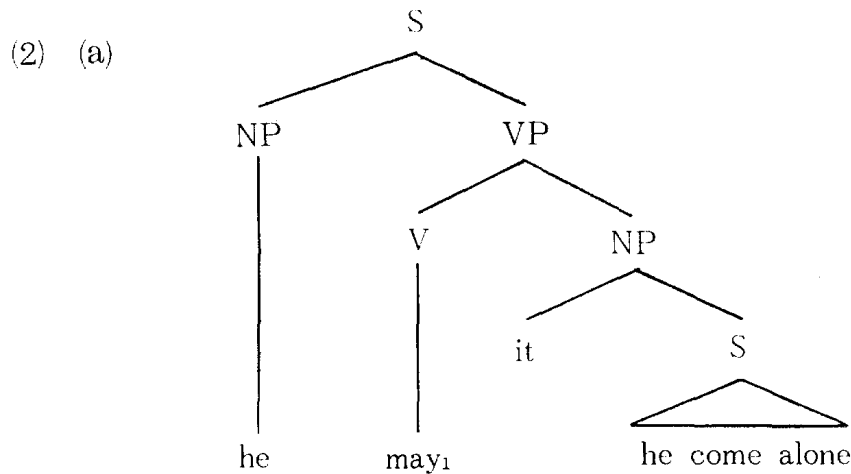
Modals の統語的特性に着目しての (拡大) 標準理論の分析では, その意味的特性の説明が明示的には示し得ない憾みがある。殊にその両義性の説明は, あげて解釈意味論に委ねてしまう他はないのである。ところで

(1) (a) He may₁ come alone. [許可] (……できる)

(b) He may₂ come alone. [可能性] (……かもしれない)

に見る意味の二面性を重視する立場から, これを明示的に分析するものとして, Ross を中心とする生成意味論者たちの「助動詞=本動詞」論がある。

Modals は前述したように, その成立の歴史的過程では本動詞としての起源をもつ。従って形態的・統語的には独特の発展 (助動詞化) を遂げつつも, do (疑問・否定・強調) や have (完了), be (受身・進行) の助動詞群が, 単なる統語上の指標となり果て, それ自体の意味を空虚化したのに較べれば, その叙事的意味機能を2つとも持ち続けている所に, 大きな特徴がある。



Ross らの分析はこの特徴を見事に捉えていると言えよう。彼らは上掲の(1)(a)(b)の分析を前頁の樹形図のように示している。

即ち, may を本動詞として捉え, (a) (本来的意味の場合) では, 「He × may₁ × S」と2項述語形式で, (b) (認知的意味の場合) では, 「S × may₂」と1項述語形式で, それぞれの分析を区別している。即ち(a)では補文目的語をとる他動詞 may₁, (b)では補文主語をとる自動詞 may₂とするのである。この分析は, Modals₁ が「主語についてある種の意志・習性・能力・許可・義務」を述べるのに対し, Modals₂ が「命題について speaker の知識・判断」を述べていることを明示的に示していると言えよう。

尚この分析の妥当さを鮮明に示してくれるのは, 受身変形による意味の変化である。例えば

(3) Tom may visit Carol tomorrow.

(a) Tom は (明日 Carol を訪ね) てもよい。(may₁)

(b) (Tom は明日 Carol を訪ねる) かも知れない。(may₂)

(4) Carol may be visited by Tom tomorrow.

(a) Carol は (明日 Tom に訪ねられ) てもよい。(may₁)

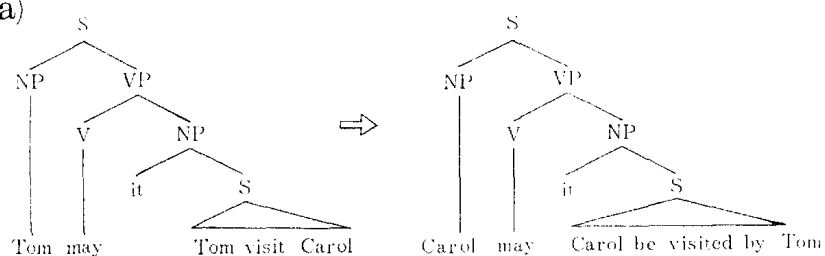
(b) (Carol は明日 Tom に訪ねられる) かも知れない。(may₂)

〈注〉 対照の便のため, 日本語訳の拙さは敢て問わない。

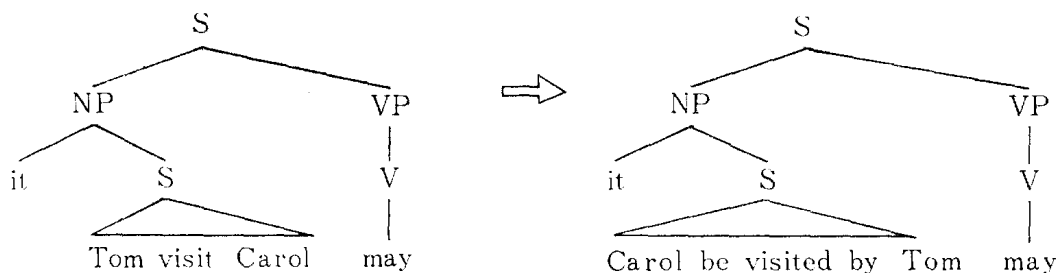
に見られるように, may₁ [(3)(a)→(4)(a)] では受身変形により, 許可される主体が変わって, 文意は変化を受けるが, may₂ [(3)(b)→(4)(b)] では受身変形を受けても文意は変わらない。この事実は, may₁ の主語は Tom であり, may₂ の主語は命題 Tom-visit-Carol であることを示している。

即ち上記日本語訳のカッコが示すように, may₂ では命題内部に受身変形が吸収されていて, 全体の意味に影響を及ぼさない。従って受身変形に対して透明であり得るのである。これを Ross らは次のように構造分析をする。

(3)(a)→(4)(a)



(3)(b)→(4)(b)



このように Modals のもつ両義性は、生成意味論的立場からは明快に示され得る。しかし逆に、この分析による限り、Modals のもつ統語的特性は説明に窮するのである。ただこの外的特性は英語に特有の現象であって、他の諸言語に類例を見ない。英語に最も近いドイツ語でさえも、Modals は本動詞と変らない統語的様相を見せる。後述するように日本語にも対応する事実は見かけられない。こうした点から考えると、どうやら生成意味論的分析の方が universal なものと言えよう。唯英語学習の立場からは、英語独自の外的特性こそが重大な関心とならざるを得ない。従って Modals の外的特性の分析には(拡大)標準理論の立場から、そして内的特性の分析には生成意味論の立場から、適宜に理解の助けを借りて行くことにしたい。

Ⅳ. 日本語の Modals

日本語の深層構造の中に、Modals を一構成素として位置づけている分析には、井上 (1969) や中右 (1973) がある。そのうち井上を例にとってみれば、概略次のようである⁽¹⁾。

- | | | |
|------|---------------------------------|--|
| PS1. | $S \rightarrow (DS) - MS (SP)$ | DS : Sentence Adverb
MS : Main Sentence
SP : Sentence Particle |
| PS4. | $MS \rightarrow Snuc + Aux$ | Snuc : Sentence Nucleus |
| PS5. | $Aux \rightarrow (Aux_1) Aux_2$ | Aux : Auxiliary Verb |
| PS6. | $Aux_2 \rightarrow T (M)$ | T : Tense Suffix
M : Modal |

そして Aux_1 には *i* (progressive), *simaw* (perfective), *ar* (static) などの Aspect 形式素を想定し、 Aux_2 には Tense (*ru*, *Ta*) に続く optional な形式素として Modals を設定している。Modals はその意味特徴から次の 3 つに下位分類されている。

Modal₁……no + da (assertive), soo + da (reportive), daroo
(presumptive)

Modal₂……ro (imperative), ru + na (prohibitive)

Modal₃……yoo (intention), ru + mai (negative intention)

そして Modals の共通する統語特性として

(1) これらの述語を持つ記号列は「埋めこみ変形」の成分とはなり得ない（即ち使役変形，受身変形，可能変形の適用を受けないし，名詞を修飾する連鎖ともなり得ない）。

(2) no + da を除けば，すべて tense-suffixes を持たない（即ち過去形がない）。

としている。

〈注〉 中右 (1973) では，井上の Aux₁ に相当する Aspect 形式素は，先行する Predicate Phrase の中へ組みこんでしまい，単に Aux→T (M) としている。しかもこのMには井上の SP (Sentence Particle) が含まれてしまっている。そしてその共通特徴を

(1) すべて文末に起る（統語特性）

(2) 命題に対する話者の心的情的態度を表明する（意味特性）

としている。従って ne (confirmative), ka (question) などもすべて Modals として取り扱っている。

この井上の分析を Chomsky の分析と並べてみると概略次のようになる。（対照部分のみ）

{Chomsky: T (M) (Perf) (Prog) VP'
{井 上: VP (Aux₁) T (M)

〈注〉 Chomsky の VP' と井上の VP には微妙な差異があるが，今は問わない。

このうち井上の Aux₁ が Aspect 形式素であるから Chomsky の (Perf) (Prog) に対応している。従って語順の違いを除けば，両者の分析は軌を一にしているように見える。しかし実際にはその統語特性も両者の間には大きな差異があるし，その意味内容も，僅かに daroo, yoo, ru + mai が話者の「推量」を表わす意味で，英語の Modals₂ の一部と対応しているに過ぎない。従って「英語の Modals 学習の問題点を究明する」本論の立場からすれば，どうしても英語の Modals と意味的に対応

する日本語を捉え、その実態を探る中で、問題点を浮び上らせる必要がある。

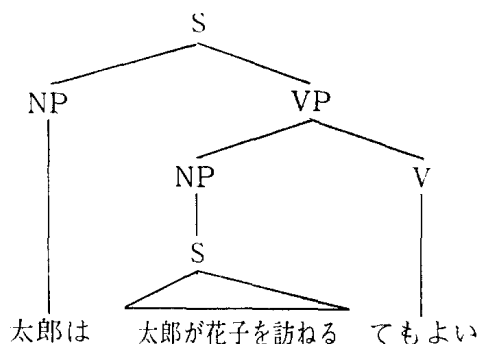
先ず Modals の意味特性を明示する Ross たちの分析を日本語に適用してみよう。

(5)(a) 太郎は花子を訪ねてもよい。(may₁)

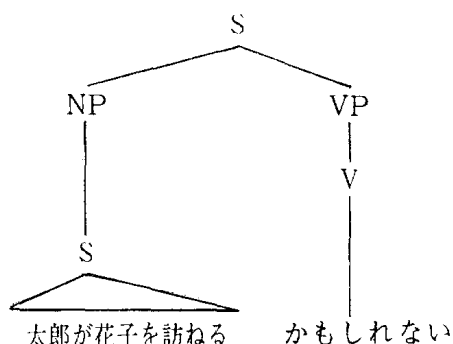
(b) 太郎は花子を訪ねるかもしれない。(may₂)

をそれぞれ樹形化して

(5) (a)



(5) (b)



とするならば、日本語も英語の Modals と、その意味的特性を共有していることが分る。ただ英語の Modals の両義性は、日本語では別個の 2 語で表わさなければならない。しかもこの 2 語とも、中右、井上の M 中には見られなかった述語である。ではこれらの述語の統語的特性はどんなものであろうか。

「てもよい」「かもしれない」は現在それぞれ 1 語の助動詞として認識されていると考えてよいが、もともと

[.....V]s te mo yoi
ing形 題目の提示の係助詞 形容詞

(Lit: Even ~ing is good)

[.....V]s ka mo shir e nai
疑問の副助詞 題目の提示の係助詞 動詞 可能の助動詞 否定の助動詞

(Lit: Even it cannot be known whether.....)

のように、時枝 (1950) の所謂「入子型」の積み重ねになる句構造をもっている。今、とりあえず、英語の Modals のそれぞれの意味に対応すると考えられる日本語のうち、典型的なものを表記して、更に詳細に検討し

て行きたい。

	モ	ダ	ル ₁	モ	ダ	ル ₂
will shall	(y)oo	mai		daroo	(y)oo	mai
	ase-yoo					
can	(r)eru,	(r)areru		hazu-ga-nai		
	koto-ga-	dekiru				
may	te-mo-	yoi		ka-mo-shir-e-nai		
				rashii		
must	anakute-wa-	ikenai		ni-chigai-nai		
	te-wa-	ikenai				
should ought (to)	beki-	da		hazu-da		
need not	anakute-mo-	yoi				
	ni-oyob-	anai				
dare not	(aete……)	nai				

以上のうち、統語的特性から英語の Modals に匹敵するものは will (shall) の項の oo, yoo, daroo, mai だけであろうが、比較対照の観点から、爾後上記の述語群を日本語で「モダル」と呼んで行くことにする。従って「モダル」は「英語の Modal と意味的に対応する日本語の述語」と解して欲しい。

ところで以上のモダルはすべて共時的には1語として認識されて居り、助動詞的機能を果していると考えてよい。従ってその統語的特性を、先行する述語との関連から、概略次のように下位区分できよう。

1. 先行の動詞の conjunctive form と融合して complex predicate を作るもの

(y)oo (意志)

(r)eru, (r)areru (可能, 能力)

ここで言う conjunctive form とは動詞の終止形 (ne-ru, aruk-u) から語尾の (r)u を除いたもので、動詞の連鎖を許し、複合述語 (例えば ne-hazime-te-ir-u) を作る形態を言う。そして conjunctive form が母音で終る語には yoo, reru, rareru を、子音で終る語には oo, eru, areru を続かせることになる。

僕は明日 dekake-yoo.

今日は大いに ganbar-oo.

今夜は早く ne-reru (ne-rareru).

彼はもう aruk-eru (aruk-areru).

なお (y)oo は起源的には話者の推量の意味を含んだ陳述である。

それも yokar-oo. (←yoku-ar-oo)

しかし今は普通, 一人称を主語とする意志表現に限られつつある。複数一人称の場合は当然「勧誘」の意味が附帯する。

さあ, dekake-yoo.

従って推量の意味はすべて daroo が一手に背負っている。

それも yoi-daroo.

(なお (r)eru と (r)areru の間には微妙な統語的, 意味的差異があるが, 今は触れない)

2. 先行の動詞 (形容詞・形容動詞) の ing-form (「て」形) (否定形も含めて) に続くもの

te-mo-yoi (許可), te-wa-ikenai (禁止)

anakute-mo-yoi (不必要), anakute-wa-ikenai (義務)

ここで言う「て」形とは, 上記 conjunctive form に te を付し, 必要な音韻規則を経て生じた形で, 英語の分詞, 動名詞に該当する機能をもつ。

osie-te (教えて), aw-te (会って), yom-te (読んで)

ookiku-te (大きくて), kirei-de (きれいで)

従ってその否定形は

osie-naku-te (教えなくて) aw-anaku-te (会わなくて)

yom-anai-de (読まないで) ookiku-naku-te (大きくなくて)

となる。上記のモデルは

学校へ ik-te-mo-yoi. ik-anaku-te-mo-yoi.

学校へ ik-te-wa-ikenai. ik-anaku-te-wa-ikenai.

のようにそれぞれ may, need not, must not, must に対応する。

3. timeless な non-past tense に続くもの

beki-da (当然)

koto-ga-dekiru (能力), ni-oyob-anai (不必要)

これらの助動詞に先行する述語には, 一応 tense がある。所謂 non-past

tense であるが、その内容は「現在」又は「未来」に関する現実的陳述ではなく、timeless な抽象内容を示すだけのものである。

君自身が yuku-beki-da.
 彼は速く oyogu-koto-ga-dekiru.
 わざわざ kuru-ni-oyob-anai.

4. Sentence (tense がある) に続くもの

daroo, rashii,
 hazu-da, hazu-ga-nai
 ka-mo-shir-e-nai, ni-chigai-nai

一見してこれらのモダルが、すべて話者の「推量」表現であることを知る。英語の Modals₂ に意味的に対応している。そしてこれらが「命題に対する推断」である以上、命題が tense をもつ完全な文であることも容易に想像できる。

[彼はもう ne-ru]-daroo. [ru は non-past tense]
 [彼はもう ne-ta]-daroo. [ta は past tense]

この文の daroo の位置へ、上記助動詞の何れを代入しても適格文が得られる。

以上概観したように、1.~3. はモダル₁, 4. はモダル₂ であり、モダル₂ の特徴は「文に続く」のに反し、モダル₁ の方は「複合述語を作る」と言えよう。3. の助動詞は tense に続いているように見えるが、所謂「終止形」で、内容は陳述ではなく、概念である。この「終止形」には時枝 (1950) の言う「零記号の陳述」の機能はない。従って

* 彼は速く oyog-ta-koto-ga-dekiru.
 * わざわざ kur-ta-ni-oyab-anai.

のごとく past tense を用いると非文になる。そしてモダル₁ とモダル₂ の統語上の差異は、(5)(a), (5)(b)の樹形図に明らかなように、その本質的な意味構造の差異に基づいている。

〈注〉 ① mai は子音動詞の終止形、母音動詞の conjunctive form に続き、上記下位区分の 1.3. に跨がっている。mai は1人称主語について「否定意志」を表わし、他の人称主語について「否定推量」を表わす。

もう二度と yuku-mai. (意志)

もう雨は furu-mai. (推量)

この点では (y)oo がやはり 1 人称主語について「意志」を、他の人称主語について「推量」を表わすことと軌を一にしている。この (y)oo, mai の両義は, will, won't の両義とぴったり一致している。

② will₂ のもう一つの意味である「未来」については、対応する日本語がない。日本語の「未来」は non-past form (即ち終止形〔但し時枝のいう「零記号の陳述」をする終止形〕) で表わされるからである。

③ 上掲のモデルは典型的なものを選んだに過ぎず、他に「つもりだ」「てもかまわない」「ようだ」など考えられるが、本論の立場からは、無視して行きたい。

V. Modals の統語上の制約

Modals はその本来的意味の場合と、その認識的意味の場合とで、その意味特徴の必然から、各種の統語上の制限に差異が生ずるのも当然であろう。そして特に Modals₁ が主語指向型であるのに対し、Modals₂ が話者指向型である点は最も本質的な差異であり、それに基づく種々の制約が生ずる。

1. 疑問文に於ける生起制限

Modals₂ が話者指向型であり、命題に対する話者の推断を表現するものであるからには、これを疑問文に用いることはあり得ない。自分の推断を相手に問い尋ねるのは不合理だからである。従って

(6) * (a) May₂ she be ill now?

* (b) Must₂ she be there this evening?

は Modals₂ の意味としては非文である。もっともこれらを Modals₁ の意味にとれば合法文であることは言うまでもない。(但し(a)の文は may₁ の意味にとれば、今度は文意がおかしくなるけれど)

ところが、同じ「可能性」を意味しながらも、can を用いた疑問文は非文にならない。

(c) Can₂ she be ill now?

この差異が明瞭に示すように、can₂ の「可能性」には may₂, must₂ のも

つような話者の推断を主張する響きがない。それは四囲の状況から考察され得る可能性としての話者の判断を叙述する味わいが深い。may₂, must₂が「主観の主張」であり、can₂は「客観的判断の叙述」なのである。従って may₂, must₂ を人に尋ねる不自然さは can₂ にはない。自分の判断の正否を相手に尋ねるのは、ごく自然なことだからである。

この事を日本語のモダル₂ で見てみよう。

(7)? (a) 彼女は今病気 ka-mo-shir-e-nai か。

(b) 彼女は今夜そこへ行く ni-chigai-nai か。

(a)文はやや不自然に響くが、これも

(a)' 彼女は今病気 ka-mo-shir-e-nai のか。

のように「の」を付して一たん名詞化（即ち命題化）すれば立派に適格文となる。(b)文は「の」を付すまでもなく適格文である。要するにモダル₂ は、Modals₂ がもつほどの主張性はなく、多分に推断の確率の叙述となっている。従って can₂ の場合に似た「推断の表明+その正否の質問」の味わいを持っているようである。この点で、may₂, must₂ が疑問文に馴染まないことは学習上の躓き石となる。

2. 拘束節に於ける生起制限

Modals₂ が「話者の推断」である限り、その陳述は当然 Ross (1970) の言う遂行節 (performative clause) を作る。例えば may₂ は

I ASSERT it is possible.

という意味あいになろう。従って疑問文に生じないのと同じ理由で、拘束節にも Modals₂ の表われることは殆どない。

(8) * (a) If it will₂ rain tomorrow, the picnic will be put off.

* (b) We will start when he will₂ arrive.

* (c) We will choose the girl who may₂ type best.

拘束節の性格はその timeless な抽象性にある。上記(a)の「条件」にしる、(b)の「時」にしる、又(c)の「修飾」にしる、何れも陳述内容は現実性を捨象した概念に過ぎず、主節や自由節の持つような遂行的性格は持たない。従ってこれが自由節の場合は

(d) We will begin dinner because he will₂ arrive soon.

に見るように適格な文となる。この拘束性の有無を、遂行分析の立場からは、次のような基底構造の相違として捉える。

(b)' I ASSERT [we will start when he arrives].

(d)' I ASSERT [we will begin dinner] because he will arrive soon.

即ち(b)'では拘束節 (when…) が単に1つの概念 [時] となって主節に密接に随伴してこれと一体となり、遂行動詞の陳述内容となっているのに反し、(d)'では because 以下が自由節として、遂行陳述内容の外に在る。そして別の遂行陳述の対象となり得るのである。もし非文の(b)を分析すると

(b)' I ASSERT [we will start] when he will arrive.

の形となり、“彼が到着する未来時に私は主張する” こととなる。非文の理由はこの不合理性に在る。

日本語のモダル₂の方は

(9)* (a) 明日雨が降る daroo なら、ピクニックは延期されるだろう。

* (b) 彼が着く daroo ときに、出発しよう。

(c) タイプの一番上手に打てる ka-mo-shir-e-nai 娘を選ぼう。

(a)(b)の例のように will₂ (未来) は日本語では non-past form として、所謂 tense で表わされるので、直接の比較にならないが、推量の daroo を用いるなら非文になる。ただ

(a)' 明日雨が降 ru なら (or 降っ tara), ピクニックは延期されるだろう。

のように、“非過去” 時制を will₂ と解する限りは、日本語の方は非文とならない。又 ka-mo-shir-e-nai の場合は、(c)に見るように、若干生硬な感じは免れないが非文とは言えない。これは疑問文の場合に述べたように、モダル₂のもつ主張性の弱さのせいだろう。何れにせよ、この型の制約が英文の基本的段階のものだけに、学習上の大きな問題点となることは間違いない。

3. 命題の状態性に係わる制約

命題内容が状態文か動作文かで Modals₁ と Modals₂ の生起が異なる。「話者主張」の対象となる命題の内容は、状態文でも動作文でも構わないのだから、Modals₂ は何れにも存在し得る。しかし Modals₁ の「意志」「能力」「許可」「義務」は主として動作に関わりのある概念だから、Modals₁ が状態文に生ずることは少ない。

- (10) (a) He may come everyday. (may₁ or may₂)
 (b) He may wish to come everyday. (*may₁, may₂)
 (c) He must work tomorrow. (must₁ or must₂)
 (d) He must be working tomorrow. (*must₁, must₂)

このように「状態」性の命題（厳密に言えば、命題の述語に [+state] の意味特徴があるもの）には modals₁ の意味解釈が拒否される。

状態文の中には、上記(d)に見られるように、進行相も含まれる。更に形容詞による叙述も該当する。

- (e) The girl must be very tall. (*must₁, must₂)

しかし形容詞文でも [-state] の意味特徴を持ち得る場合もあるから注意が必要である。

- (f) The girl must be careful in crossing the streets. (must₁ or must₂)

日本語のモデルについてはどうであろうか。

- (11) (a) 彼は毎日来 te-mo-yoi.
 彼は毎日来る ka-mo-shir-e-nai.
 (b) *彼は毎日来たく te-mo-yoi.
 彼は毎日来たい ka-mo-shir-e-nai.
 (c) 彼は明日働かなく te-wa-ike-nai.
 彼は明日働く ni-chigai-nai.
 (d) 彼は明日働いてい naku-te-wa-ikenai.
 彼は明日働いている ni-chigai-nai.
 (e) 彼は背が高く naku-te-wa-ikenai.
 彼は背が高い ni-chigai-nai.
 (f) その娘は道路を横断するときは注意してい naku-te-wa-ikenai.

その娘は道路を横断するときは注意している ni-chigai-nai.

と見て来ると, どうやらモダルは modals ほどには命題の述語の〔state〕に影響されることはなさそうである。日本語のモダル₁は命題の状態性に対しても「意志」「能力」「許可」「義務」の表現をし得る点は, 英語の modals₁ との大きな差異となり, 日本人学生に modals₁ と状態性の係わりの認識を難しくしていることは争えない。

以上 I ~ V の観察に基づいて, 英語の Modals と, それに意味的に対応する日本語のモダルの差異度を, Lado (1957) の所説に依存して, 形態 (F), 意味 (M), 分布 (D) の三視点から捉え, これを FMD 率として表現してみると, 概ね下表のようになろう。

	英語の Modals	日本語のモダル	差異度	学習困難度	
				理解学習	発表学習
F	1. 確立した範疇に属する一定数の語群である	1. 必ずしも範疇として確立していない若干数の語群である		小	中
	2. 人称・数による語形変化がない	2. 同じ		小	小
	3. 疑問・否定・強調に「do」の支えがない	3. もともと対応する事実はない	大	小	中
	4. 非定形がない	4. 英語の ing 形 に対応する非定形がある		小	中
	5. 原形動詞を従える	5. 先行の動詞の conjunctive form, "te" 形或は tense をもった form に続く		小	中
M	1. 各語とも本来的意味と認識的意味の両義をもつ	1. (y)oo, mai の他は, それぞれ単一の意味しか持たない	中	中	大
	2. 本来的意味は「主語指向」, 認識的意味は「話者指向」である	2. 同じ		中	大
D	1. optional な構成素である	1. 同じ		小	小
	2. 述語群の先頭に立つ	2. (tense 形式素を除き) 述語群の最後尾に在る		小	中
	3. 疑問文では主語の前に立つ	3. 疑問文は文末に「か」を付すのみ		小	中
	4. Modals ₂ は疑問文に生起するのはまれである	4. やや制約が弱い	大	中	大

5. 拘束節にも Modals ₂ は 生起し難い	5. やや制約が弱い	中	大
6. 状態文に Modals ₁ は生 起し難い	6. 殆ど制約は見らない	中	大

以上で明らかのようにFMD率は、意味がほぼ平行しているのを除けば、FもDも大きく異なるので、1-2。しかし学習上の困難度に関しては、理解学習と発表学習とでは別種の考慮が必要となる。形態的に大きく異なっているとしても、正しい形態が既に与えられている理解学習では、困難度は思いの外低いが、発表となると、この日英両語の差異が干渉となって著しく困難度を高めるからである。分布についても同じことが言える。殊に拘束節や疑問形に存在する modals₂ の生起制限、状態文に於ける modals₁ の制約などは、日本語に対応事実がないので、発表学習には大きな困難が予想される。

* Let us start if it will₂ be fine tomorrow.

* May₂ he be ill now?

* You must₁ be studying now, John.

などの非文は、日本語の意味につられて、頻発が懸念される。従って理解学習はBレベル、発表学習はCレベルと断ぜられる。

〈注〉 上記の学習困難度は「基本的な事項」に関わるもので、「否定」や「時制」が加われば、困難度は更に増す。以下、これらの場合を別に検討して行く。

Ⅵ. Modals と「否定」

前述したように、英語の modals は自分自身の意味を確保しつつ、助動詞として、本動詞を従える。「助動詞+本動詞」で恰も一つの述語の如き統語上の融合を見せる。従って否定辞 not の入る位置は1ヶ所しかない。所が意味的には2つの動詞の連鎖であるのだから、与えられた not の働きが、どちらの述語を否定しているのか、曖昧になる。

(12) (a) He may₁ not go. (=He is **not** permitted to go.)

- (b) He may₂ not be sane. (=It is possible that he is **not** sane.)

の2文に見るように、not の作用域が明瞭に異なる。(a)文では may が否定され、(b)文では be (厳密には He-be-sane) が否定されているからである。これは Palmer (1974) の言うように、連鎖動詞 (catenative) の構文に見られるものと同質である。即ち⁽²⁾

- (13) (a) I prefer to come.
 (b) I **don't** prefer to come.
 (c) I prefer **not** to come.
 (d) I **don't** prefer **not** to come.

このように連鎖動詞の場合は、否定辞の作用域が明確である。英語の Modals では not の場所が1つに限られて居り乍らも、連鎖動詞と同様に2つの動詞の意味を保持しているところに、曖昧さがつきまとうのである。

- (14) (a) You can't come. (来てはいけない)
 (b) You can not come. (来なくてもよい)
 (c) You can't not come.⁽³⁾ (来ないわけにはいかない)

に見るように、not の作用域にまつわる微妙な意味変化は学習するのが難しい。

しかし詳細に用例を検討してみると、この「否定」による両義性は、Modals₁ の場合に限られていることが分る。Modals₂ の場合はすべて「Vの否定」(従って「命題の否定」)に限られ、Modals 自身が否定されることはない。例えば荒木 et al (1967) から用例を借りると、

- (15) (a) He won't₂ be serious.
 (I suppose [that he is **not** serious].)
 (b) He may₂ not be serious.
 (It is possible [that he is **not** serious].)
 (c) He mustn't₂ be serious.
 (It is certain [that he is **not** serious].)
 (d) He shouldn't₂ (ought₂ not to) be serious.⁽⁴⁾
 (It is reasonable to conclude [that he is **not** serious].)

のように命題部分（上例の〔 〕の中の部分）が否定されていることが分る。ただ厄介なことに、 can_2 だけは逆に Modal の方が常に否定され、命題部分が否定されることはない。

(e) He can't₁ be serious.

(It is **not** possible [that he is serious].)

これに対し Modals₁ は次のように両義性を孕んでいる。⁶⁾

(16) (a) He'll₁ not do what he's told.

(He's **not** willing [to do what he's told].)

(b) He won't₁ do what he's told.

(He insists on [**not** doing what he's told].)

(17) (a) You may₁ not stay here.

(I don't permit you [to stay here].)

(b) You may₁ nót stay here.

(I permit you [**not** to stay here].)

(18) (a) You can't₁ go.

(You are **not** permitted [to go].)

(b) You can₁ nót go.

(You are permitted [**not** to go].)

もう一つ厄介な現象がある。それは obligation を表わす Modals ($must_1$, $ought_1$, $should_1$) の否定形は「命題否定」に限られて居り、Modal 自体の否定にはならないことである。

(19) (a) We mustn't₁ ($ought_1$ not to / shouldn't₁) go now.

(We are obliged [**not** to go now].)

(19(a)に欠けている「Modals 自体の否定」は、意味的に次の構文で補われている。

(b) We needn't go now.

(We are **not** obliged [to go now].)

従って次のような意味上の反対関係は学習上の重点となっている。

(Modals₁) He must go alone. \longleftrightarrow He need not go alone.

(Modals₂) He must be ill. \longleftrightarrow He must not be ill.

以上のやや複雑な「not の作用域」を一覧表にすると次のようになっている。

る。

	Modals ₁ の否定域	Modals ₂ の否定域
will	M or V	V
can	M or V	M
may	M or V	V
must (should ought to)	V	V
need	M	

〈注〉 M は「Modals の否定」、V は「本動詞(命題)の否定」を意味する。

翻って日本語のモダルの否定の様様を見てみよう。先ず「話者の推量」という共通の意味基盤を持つモダル₂の方から見て行く。

- (20) (a) 明日は雨が降る daroo.
 (b) 明日は雨が降らない daroo.

で分るように、daroo は先行する述語(動詞, 形容詞, 形容動詞)を「ない」で否定できるが、daroo 自身には否定形がない。

この種のモダル₂は他に kamoshirenai と nichigainai, rashii がある。

- (21) (a) 明日は雨が降らない ka-mo-shir-e-nai.
 (b) 明日は雨が降らない ni-chigai-nai.

尤もこれらのモダルは始めから否定形であるのだから、更にその否定形はとり難いこともある。

- (22) (a) 明日は雨が降らない rashii.
 * (b) 明日は雨が降る rashiku-nai.

モダルの方を否定した(b)文は非文になる。(但し「男らしい」のように体言についた rashii は全体として形容詞となり、「男らしくない」と否定形にもなり得るが、モダルとは別語と考えるべきである)。一方

- (23) (a) 彼は来る hazu-da.
 (b) 彼は来ない hazu-da.
 (c) 彼は来る hazu-ga-nai.
 (d) 彼は来ない hazu-ga-nai.

に見る如く、先行する述語も、モダル自身も否定できるものもある。hazu-

ga-nai は cannot₂ に相当し, cannot₂ が Modal 自身の否定にしかならなかったのと軌を一にしている面白い。ただ hazu-da は論理的必然を意味し, should₂ や ought₂ to に相当するが, hazu-ga-nai はモダル否定であり, 意味も cannot に相当して「不可能性」の表現となる。(15)(d)で前述したように should₂ not や ought₂ not to が命題否定となるのは様子を異にしている。

モダル₁へ眼を移すと, 先ず

(24) (a) 明日行k-oo.

(b) 明日は行く mai.

のように (y)oo のモダル否定は別語 mai が対応している。しかもこれらの2語とも命題否定形を持たない。

* (c) 明日は行かない oo.

(d) 明日は行かない mai.

は共に非文となる。

(25) (a) 彼は速く泳g-eru. (泳g-areru).

(b) 彼は速く泳g-e-nai. (泳g-are-nai).

のように (r)eru, (r)areru はモダル否定のみであり, 又

(26) (a) 彼は長時間眠る koto-ga-dekiru.

(b) 彼は長時間眠らない koto-ga-dekiru.

(c) 彼は長時間眠る koto-ga-deki-nai.

(d) 彼は長時間眠らない koto-ga-deki-nai.

のように, V否定もM否定も可能なものもある。同様に

(27) (a) 君は行っ te-mo-yoi.

(b) 君は行っ te-wa-ikenai.

(c) 君は行かなく te-mo-yoi.

(d) 君は行かなく te-wa-ikenai.

も, 両種の否定が可能だが, yoi が yoku-nai ではなく, ikenai と別表現をとっている。

(28) (a) 君自身が行く beki-da.

(b) 君自身が行く beki-de-nai.

? (c) 君自身は行かない beki-da.

のように命題否定の方は非文でないまでも, 適当ではないものもある。

(29)*(a) 君自身で行く ni-oyoba-naku-nai.

* (b) 君自身で行かない ni-oyobanai.

の如く、V 否定もM否定も不可能なものもあって雑多である。以上、日本語のモダルの否定域を表示すると次のようになっている。

モダール ₁	否定域	モダール ₂	否定域
(y)oo, mai	M	daroo	V
(r)eru, (r)areru	M	ka-mo-shir-e-nai	V
koto-ga-dekiru	V or M	ni-chigai-nai	V
te-mo-yoi	V or M	rashii	V
beki-da	M	hazu-da	V or M
ni-oyob-anai	×		

これを前掲の英語の Modals の場合と比較してみると、大まかな対応はあるが、やはり微妙に食い違っていることを知る。否定形の Modals の学習は、この食い違いから来る干渉もあって、理解学習面ですら、前掲の基本型よりは一段と難度は高いことが予想される。否定形の「Modals とモダル」の対照を表にすると次のようになる。

	Modals の否定形	モダルの否定形	差異度	学習困難度	
				理解学習	発表学習
F	1. 「M+(not)+V」と否定辞の位置は1ヶ所に限られている。	1. 「V+(nai)+M+(nai)」と否定辞の位置が2ヶ所ある。	大	小	中
	2. 否定形に「do の支え」は要らない。	2. 同じ		小	小
M	1. 否定辞の作用域がMかVかあいまいになる。	1. 否定辞の作用域は明確で、紛れはない。	大	大	大
	2. Modals ₁ では否定されるものが「M or V」であることが多い。	2. モダール ₁ では否定されるものが「M」であるものと「M or V」であるものと半ばする		中	大
	3. Modals ₂ では否定されるものが「V」であることが多い	3. 同じ。		中	大
D	1. 否定辞 not は「M+V」の連鎖の中間位置に起る。	1. 否定辞「ない」は「V+M」のそれぞれの後に起り得る。	大	小	中

「Modals の否定形」の学習は、形態の理解に関する限り、その形態差の大きさにもかかわらず、さして困難ではない。しかし意味に関しては、その基本的段階ではさほど躓きはないものの、やや微妙な文例になると忽ち混乱する。特に両義にとれる場合は、文脈に沿って正しく一方の意味を選択することは仲々難しい。まして発表学習では高度の習熟が必要となろう。従って、FMD率は0—3、学習困難度のレベルは理解学習でCレベル、発表学習ではDレベルと断ぜられる。

VII. Modals と Tense

Modals を含む構文には、Modals 自身の「時」と、続く述語のもつ「時」とがあり、当然意味解釈上の重要な問題となってくる。しかも Modals₁ と Modals₂ の間には、この「時」に関して、統語的にも意味的にはかなりの差異が見られ、学習上の大きな躓き石となっている。先ず便宜上、比較的統一性の高い Modals₂ の方から見ていこう。

A. Modals₂ の「時」

- (30) (a) He may₂ be there tomorrow.
 (b) He may₂ be there now.
 (c) He may₂ have been there yesterday.

の3文を見るに、命題部分の He-be-there の「時」は、(a)では「以後」(未来)、(b)では「同時」(現在)、(c)では「以前」(過去)を意味している。もともと Modals₂ は「命題に対する話者の推断」を述べるものであるから、当然命題内容は「以前」「完了」「同時」「以後」更に「timeless」の何れでもあり得る訳である。そして統語的には

- (a. M+原形動詞 → 「同時」「以後」「timeless」
 (b. M+完了不定詞 → 「以前」「完了」

という“形態と「時」”の関連をもつ。従って同形で2つ以上の「時」が意味され、実際の「時」は文脈が決定する。例えば

- (31) (a) He may₂ be a professor. [timeless]
 (b) He may₂ be ill. [同時]
 (c) He may₂ come soon. [後時]

のように。

しかし意味上の必然として考えられることは、命題が「行為」であればそれは未来に起る事象に対する推断であり、命題が「状態」であれば、それは現在の事象に対する推断である公算は極めて高い。従って

- (a. 命題の述語が [+state] の場合 → 「同時」
 (b. 命題の述語が [-state] の場合 → 「後時」 or 「timeless」

という目安がつく。しかしこの制約は厳密なものではなく、明瞭な「時の副詞」を伴えば [+state] の動詞でも

Polly may₂ be ten years old tomorrow.

のように「後時」を表わし得るし、また [-state] でも反復性を伴えば

Polly may₂ come here every day.

のように「同時」を示すと言える。ただ must₂ は「現実の事態について確信的推断」をするのが立前であるから、[+state] の動詞を伴うのが必要で、[-state] の動詞を伴う場合には must₂ の意味にはならない。

(32) (a) He must be serious. [must₁ or must₂]

(b) He must go at once. [must₁ に限る]

同様に「M+完了不定詞」の「時」も、「完了」か「以前」かは文脈が決定する。例えば、

(33) (a) He must₂ have finished it by now.

(=It is certain that he **has finished** it by now.)

(b) He must₂ have finished it yesterday.

(=It is certain that he **finished** it yesterday.)

のように、(a)の命題は「完了」、(b)の命題は「以前」を指向している。尚この形態の場合には、命題の述語の意味特徴 [+state] とは関係がない。

(34) (a) He must₂ have been ill. [+state]

(b) He must₂ have visited her friend. [-state]

(35) (a) He ought₂ to have been tired out. [+state]

(b) He ought₂ to have started yesterday. [-state]

(彼は昨日出発したはずだ)

のように [+state] の何れとも共起し、「完了」と「以前」の意味区別との対応関係もない。

翻って日本語のモダル₂を見てみよう。「話者の推断」という共通基盤をもつだけに、英語の Modals₂ で述べたことは、ほぼ日本語のモダル₂ についても言える。即ち、

- (36) (a) 彼は明日そこへ行く ka-mo-shir-e-nai. [以後]
 (b) 彼はもうそこに居る ka-mo-shir-e-nai. [同時]
 (c) 彼は昨日そこへ着いた ka-mo-shir-e-nai. [以前]

のように命題部分の「時」は自由である。そして日本語の時制が

- (a. 非過去時制 (ru) …「同時」「以後」「timeless」
 b. 過去時制 (ta) …「完了」「以前」

を指向することは、いよいよ Modals₂ との対応を完全にしている。唯統語的には、この時制がMにもVにも自由に添えられるので、英語の「M+完了不定詞」のような無理な形態を必要としない。

(Modals) (モダル)

- (a. M + 原形 ↔ 非過去時制 + M
 b. M + 完了不定詞 ↔ 過去時制 + M

の対応が示すように、日本語のモダルは tense を「なま」のまま導入している点で、統語上英語の Modals₂ と大きく異なっている。

しかしこの統語特性の相違にかかわらず、その意味特性は日・英両語で誠によく対応している。先ず

㊦ 非過去時制の場合の「同時」「以後」「timeless」の区別、及び過去時制の場合の「完了」「以前」の区別は、文脈（特に「時」の副詞の有無）によって決まる。

- (37) (a) 彼はもうその仕事を済ませta ka-mo-shir-e-nai. [完了]
 (b) 彼は昨日その仕事を済ませta ka-mo-shir-e-nai. [以前]

㊧ 命題の述語の意味特徴 [+state] に関連しても、Modals₂ と同じ現象が見られる。

- (38) (a) [+state] の場合 → 「同時」 or 「timeless」
 彼は病気である ni-chigai-nai. [同時]
 彼は医者（である） ni-chigai-nai. [timeless]
 (b) [-state] の場合 → 「以後」
 彼は明日は来る ni-chigai-nai. [以後]

- (c) 反復動作の場合は [-state] でも → 「同時」
彼は毎朝入浴する ni-chigai-nai. [同時]
- (d) 命題が過去時制の場合は [+state] に関係がない
(彼は病気だっ ta hazu-ga-nai. [+state] (「完了」 or 「以前」)
(彼はそこへ行っ ta hazu-ga-nai. [-state] (「完了」 or 「以前」)

〈注〉 英語の must₂ と違って、日本語の ni-chigai-nai は未来の「行為」 [-state] に対する確信的推断にもよく用いられる。(上例38(b)を32(b)と比較せよ。) このため日本人学生が *He must₂ come tomorrow. のような非文を作る惧れが生ずる。

B. Modals₁ の「時」

- (39) (a) He can₁ swim fast. [timeless]
(b) He may₁ go home now. [以後]
(c) He must₁ start at once. [以後]

上例に見るように、Modals₁ は、その意味のもつ論理的必然から、常に「以後」乃至「timeless」を指向し、「以前」を振り返る眼を持たない。can₁ (能力) の内容をなすものは timeless な抽象的事象であり、may₁ (許可), must₁, should₁, ought₁ to, (義務) は何れもこれから起るべき行動・状態への話者の遂行的姿勢であるから、当然「以後」へ眼が向いている。will₁ (未来) は言うまでもなく「以後」を指向する。ただ will₁ (習性) は timeless であろう。このように Modals₁ は過去へ向けた眼を持たないから、Modals₂ の場合のように「M+完了不定詞」の形態はない。ところが

- (40) (a) He ought₁ to have come earlier.
(b) He should₁ have come earlier.
(→ He did not come early enough,)

に見られるように、「当為」の should₁, ought₁ to は完了不定詞を従えることがある。意味は「不実現の過去事象」を抽象化し、timeless な観念として現前させ、それに「当為」のコメントを与える気持である。Modals₂ の場合の、生々しい過去の息吹きを持った命題内容とは、大きく趣きを異にしている。日本語では

- (41) (a) 彼はもっと早く来る beki-datta.

* (b) 彼はもっと早く来 **ta beki-da**.

の(a)のように、モダルが過去時制になる。英語の場合のように、命題の述語の方を過去時制にすると(b), 非文になるだけに、この形態差は学習上の一つの干渉となろう。

尚その他のモダル₁の「時」については、英語の Modals₁の場合と大差はない。

(42) (a) 彼は英語が話**s-eru**. [timeless]

(b) 君も一しょに行っ **te-mo-yoi**. [以後]

(c) もう出発し **nakute-wa-ikenai**. [以後]

そして過去を振り返る眼のないことも符合を一つにしている。

(43) * (a) 彼は英語が話し**ta-eru**.

* (b) 君も一しょに行っ**ta-mo-yoi**.

などは非文である。

〈注〉 ①上記の日本語が非文である理由は、「過去時制の為」というよりはもともとこれらのモダルは先行の述語の **conjunctive form**, あるいは **ing form** に直接(時制を介在させず)つながるべき「統語上の性質による」とすべきであろう。

② 逆に **koto-ga-dekiru** は、元来 **koto** の内容が **tense** を持ち得るので、「手紙を書い**ta koto**」のように、過去時制を許容する筈である。しかし*「彼は手紙を書い**ta koto-ga-dekiru**」がやはり非文となるのは、これこそ「能力」が **timeless** な抽象的概念を内容としている為の非文と言える。

C. 過去形 Modals

英語の Modals の時制、特にその「過去」は、形態変化も一般性を欠き、代用表現を必要とする部面も多く、その用法も微妙に制約されている。その上「時制の一致」による過去形と「仮定法」による過去形が混在して、意味を多彩に分化させ、しかも個々の Modal 毎に特異の様相を呈して難解を極める。学習の困難点を考究する本論の立場からは、周辺的な個々の特異現象には深く立ち入らない。又「時制の一致」や「仮定法」については改めて章を設けて統一的に取り扱うので、本論では必要な限りに於て軽く触れるにとどめたい。

C-1 「直接」時制の過去形 Modals

ここで直接時制と言うのは、現在時制の Modals の意味と平行して、その「過去時」を指すものを言う。直接時制の過去形としては

shall→should, will→would, can→could, may→might

の4語に形態変化が見られるが、他の Modals は過去形を欠いている。但し

must→had to

の代用表現が一応確立している一方、ought, need, dare はそのまま過去形として用いられることもある。

He wanted to come, but daren't.

意味の面でも、その現在時制形式と完全に平行して過去時を意味するにはかなりの制約がある。例えば Modals₁ については

1. 「習性・特性」の will に過去形はない。
Oil will₁ float on water. → *Oil would₁ float on water.
2. 「意志」の will の過去形は否定形のみに限られている。
He would₁ not move an inch.
3. 「能力」の could は一回限りの謂わば「達成」の意味には用いられない。

ない。

*I ran fast and so could catch the bus.

このような「達成」の意味は was able to が正用法となる。

I ran fast and so was able to catch the bus.

なお「達成不成功」の意味の couldn't は非文にならない。

I ran fast, but still couldn't catch the bus. ⁽⁶⁾

〈注〉 米語では could catch the bus を非文としない人も多いようであるが。

4. 「許可」の might も稀である。

*Visitors might₁ ascend the tower for six pence last summer.

この欠けた部分を could₁ が補っていて、次のような文は非文ではない。

Visitors could ascend the tower for six pence last summer.⁽⁷⁾

5. 「意志」の shall も過去時制を持たない。

You shall die. → * You should die.

などが目立つ制約事項である。

Modals₂ については、もともと「話者の推則」という行為自体が所謂「現在的」な性質のものであるから、過去形に馴染まない。従ってそれらの過去形は殆ど見られない。

(44(a)) He may₂ be ill. (彼は病気である ka-mo-shir-e-nai)

* (b) He might₂ be ill. (彼は病気である ka-mo-shir-e-nakat-ta)

注目したいのは(b)の訳文は日本語として非文ではないことである。それは「彼が病気である」ことの可能性を、過去を振りかえって、叙述しているのである。It was possible that (he-be-ill). と叙述しているのであって、もはや現在の主張行為ではない。日本語の ka-mo-shir-e-nai は may₂ [推断的主張] の躍動する姿勢と、it is possible [可能性叙述] の静止した思考を兼ねていると思える。英語の may₂ にはこの兼有はない。この欠けた部分は can₂ (可能性) が cover する。例えば

(c) He couldn't₂ be ill.

(彼は病気である hazu-ga-nakat-ta.)

のように。この表現も「不可能性の叙述」であって、やはり推断を押しつける現在の主張行為の躍動はない。

翻って日本語のモデルの過去形を見てみると、過去形を持たないのは次の3つだけで、他はすべて過去形を持っている。

(y)oo, mai, daroo

これらは「意志」「推量」の最も本質的なモデルであり、上述した躍動性の高い現在の行為の性格を持つため、過去形に馴染めないことを意味する。逆に過去形を持つ他のモデルは、上述した ka-mo-shir-e-nakat-ta や hazu-ga-nakat-ta のように主張性と叙述性の両義をもつモデル₂ と koto-ga-deki-ta や te-mo-yokat-ta, beki-dat-ta などのように叙述性

のみのモダル₁なのである。何れにせよ、上述した英語の Modals の過去形のような制約はないし、意味も紛れはない。

〈注〉 「特性・習性」の will₁ に対応する日本語のモダルはない。単に非過去時制を用いて表わされるからである。

彼は(よく)朝食前にシャワーを浴び -ru.

従って would₁ は日本語では単に過去時制だけで足りる。(もっとも副詞「よく」など)によって意味の明瞭化がはかれるが)

彼は(よく)朝食前にシャワーを浴び-ta (mono-da).

「意志」の will の過去形も、(y)oo を直接過去時制にせず、「…とする」をはさんだ迂言表現となる。

彼は一歩も歩k-oo to shi-nakat-ta.

C-2 「間接」時制の過去形 Modals

ここで間接時制と言うのは、所謂「時制の一致」に伴って二次的に過去形をとったもので、意味的には現在形と変りはない。従って reported speech 内での過去形はすべての Modals に存在する。

- (45) (a) He said oil would₁ float on water. (習性)
 (b) He said it would₂ rain. (予測)
 (c) He said she might₁ go with him. (許可)
 (d) He said she might₂ be ill then. (可能性)

ただ学習上注意を要する若干の点を挙げると、

- shall₂, will₂ (未来) は必ずしも、もとの発話と平行しない。
 He said, "I shall come." → He said he would come.
- must₁ は「時制の一致」を受けると、had to が代用されることが多いが、must₂ は主にそのまま二次的な過去時制となる。
 He said, "I must₁ go." → He said he had to (or must) go.
 He said, "She must₂ be ill." → He said she must be ill.
- ought, needn't, daren't はそのまま reported speech に用いられる。
 He said he daren't go.
 但し本動詞で代用されることも多い。
 He said he didn't dare to go.
- 尚 reported speech の内容が現在時でも尚有効であるならば、時

制の一致は受けない。そんな場合意味に曖昧さが生ずる。

He said he ought to study harder.

(a) 彼はもっと勉強すべきだ。彼自身もそう言っていた。

〔内容は現在の〕

(b) 「もっと勉強しなくっちゃ」と彼は言っていた。

〔単に彼の発言〕

所で日本語のモデルだが、日本語にはもともと「時制の一致」という言語事象がないのだから、二次的な過去形はないし、上述のような問題事項もない。

彼は明日は降る daroo と言ってい -ru (い -ta).

彼は彼女が病氣 ka-mo-shir-e-nai と言ってい -ru (い -ta).

この日本語の明快さは、英語の Modals の類雑な制約の学習にはかえって干渉となる。

C-3 Subjunctive Mood の過去形 Modals

元来 Modals の名称が mood に由来するように、should, would, could, might, must のMood としての用法は広般で、特に帰結節には殆ど必ず Modals が用いられている。

If you loved me, I might₂ marry you.

If you'd loved me, I might₂ have married you.

但しこれに対しては次のような欠落と例外が存在する。

1. will (強い意志及び予測性) と shall (強い意志及び弱い意志) の假定形は存在しないように思われる。
2. might, could は「仮定的許可」の意味では、非現実条件文にはほとんど現われない。
3. must には過去時制形がないので、仮定的な義務あるいは必然性を表現するには would have to を用いる。^(S)

特に should の Mood 的用法は多彩で、条件節の中にも用いられる。

If I **should** see him, I would tell him.

更には「假定」の意味合いを捨象し、単に「命題化された抽象性」を与える意味で、各種の叙述に用いられる。

It is surprising that he **should** do such a thing.

これは明らかに Subjunctive Present としての近代的代用機能を果しているもので、生硬な原形動詞の使用を駆逐しつつある。

日本語の場合は、mood による形態区別はない。

もし私が鳥であったら、君のところへ飛んでゆけるのに。

条件節は「～たら」「～なら」で仮定を表わし、帰結節では「のに」、「のだが」などの付加によって意味表現を深めるに過ぎない。

〈注〉 「…たら」は「…たならば」に通ずるもので、過去時制に由来するとも言えるが、共時的には過去時制形態としては認識されていない。

この点でも日本語は簡明であり、過去形の Modals の学習にマイナスの干渉源となる。更に事を複雑にする事項として「婉曲・丁寧」の過去形 Modals がある。

C-4 「婉曲・丁寧」の過去形 Modals

この表現も、仮定法表現のもつ迂遠性を利用し、断定的な響きを避けた陳述としての「婉曲」、当りを柔げる命令、依頼としての「丁寧」に用いられる would, should, could, might の類である。

- (46) (a) That would be nice. (蓋然性)
 (b) He could (or might) be there now. (可能性)
 (c) Would you come with us? (依頼)
 (d) Could (or Might) I stay a little longer? (許可)

〈注〉 「許可」の意味の could, might はこのような「丁寧」表現に於てのみ可能である。

日本語の「婉曲」「丁寧」表現は、上記の英文を訳して、

- (47) (a) それはいいでしょうね。 (蓋然性)
 (b) 彼はもうそこへ着いているでしょう。 (可能性)
 (c) 御一緒していただけますか。 (依頼)
 (d) もう少しいてもよろしいでしょうか。 (許可)

となるように、所謂 Polite Style を用いることになる。「法」を用いる英語と、Style を用いる日本語とでは、表現法に根本的差異がある。従って、この婉曲法は日本人学生にとって、学習上の難関となっている（逆に英語国民はこの日本語の style の多様さに混乱しその学習に苦しむのだが）。

以上述べた過去形の Modals とそれに対応する日本語の モダル について、差異度と学習困難度の表記をすれば、概略次のようになる。

	英語の過去形 Modals	日本語の過去形モダル	差異度	学習困難度	
				理解学習	発表学習
F	1. Modals の過去形はその現在形と全く違った語となる。	1. モダルの過去形はその現在形に ta を付して作られる。		小	中
	2. 過去形を欠く Modals がある (must, ought, need, dare)	2. 同じ (yoo, mai, daroo)		中	大
	3. 代用表現をもつものがある (must→had to)	3. 同じ (yoo→yoo-to-shinakat-ta)	大	中	中
	4. 時制の一致により二次的な過去形がある。	4. 対応する事実はない。		中	大
	5. 仮定法の過去形過去完了形がある。	5. 対応する事実はない。		中	大
	6. 婉曲丁寧表現の過去形がある。	6. 婉曲丁寧表現は別の style を用いる。		中	大
M	1. 直接時制の過去形はその現在形の意味と平行する。	1. 同じ		小	中
	2. 間接時制の過去形は現在形の意味のままである。	2. 対応する事実はない。		中	大
	3. 仮定法過去形・過去完了形は「非現実」を意味する。	3. 対応する事実はない。	大	中	大
	4. 仮定法過去形が「婉曲」「丁寧」を意味する。	4. 対応する事実はない。		中	大
	5. should が「命題化された抽象性」を意味することがある。	5. 対応する事実はない。		大	大
D	1. 直接時制の過去形 Modals には生起制限がある。	1. 対応する事実は殆どない。		中	大
	2. 間接時制の過去形 Modals にも、制約がある。	2. 対応する事実はない。	大	中	大
	3. 仮定法に用いる過去形にも制約がある。	3. 対応する事実はない。		中	大

一見して分るように、F, M, Dとも大きく異なり、FMD率は0-3。学習難度も、理解学習が、既に正しい形で与えられているので、比較的混乱が救われるものの、複雑で多様な意味の重なりから、正しく文意を理解することはかなりの困難が予想されるので、Cレベルは免れない。表現学習に至っては、よほどの理解の深まりの上に立たねば、上述のさまざまな制約に

抵触もせずに、正しい場所へ正しい形態を選択適用することは難しい。当然 D レベルの難度と言えよう。

VIII. Quasi-modals

英語では modals と統語的・意味的特性の一部を共有するものとして、Quasi-modals と呼ばれる一群の語群があることは既に触れた。それらの意味的対応はほぼ次のようになっている。即ち

be able to (= can₁), have to (= must_{1,2}),
 be to (⇔ will₂/ought₁ to), be going to (⇔ will_{1,2})
 used to (⇔ would₁), had better (⇔ may₁)

のように、ほぼ全部がそれぞれ Modals の本来の意味、認識的意味の何れか一方、或は両方と対応を見せている。所がその統語的特性は次のように、限られた一部を共有するに過ぎない。

- (1) 3単元の欠如 … had better, used to
- (2) 「do の支え」の欠如 … 全部
- (3) 原形動詞の後続 … had better (その他は「to 不定詞の後続」と見る)
- (4) 非定形の欠如 … used to, had better

このうち(2)の「do の支えの欠如」は be 動詞, have 動詞のもともとの性質であり、それらが本動詞の場合でも do の支えはないのだから、be able to や have to を助動詞と断ずる決め手にはならない。(特に米語では、have 動詞は do の支えを要する)。従って Modals と統語的特性を多く共有するものは had better, used to の 2 語に過ぎない。要するに Quasi-modals は主として Modals と意味的に対応する表現であり、この点からすれば、日本語にモダルを設定した本論の趣旨と変りはない。唯これらの Quasi-modals が、modals の語形の欠如を補ったり (must→had to), 微妙な意味の相補に役立ったり (could の理念的能力 → was able to の成就的能力) して、独特の関連を見せている。以下その大要を概観するにとどめたい。

1. be able to

can を用いた種々の成句 (cannot help ~ ing など) を除けば、be able to は殆どの場合 can と相互に交換可能である。唯それらの過去形

に於ては, could_1 が「能力」を表わすにとどまるのに対し, was able to は「能力+実現」の意味を帯びてくる点は注意を要する。

We hurried and $\left\{ \begin{array}{l} \text{were able to} \\ * \text{ could} \end{array} \right\}$ catch the last train.

尚 be able to に can_2 の意味はない。

He $\left\{ \begin{array}{l} \text{cannot} \\ * \text{ is not able to} \end{array} \right\}$ be ill.

2. have to

must と同じ意味内容を共有し, 「義務」(must_1), と「必然性」(must_2) の両義を持つ。

(48) (a) You $\left\{ \begin{array}{l} \text{must}_1 \\ \text{have to} \end{array} \right\}$ be back by ten o'clock.

(b) There $\left\{ \begin{array}{l} \text{must}_2 \\ \text{has to} \end{array} \right\}$ be some mistake.

但しこの意味の対応には, 微妙な差異が含まれている。G. N. Leech (1971) によると, must_1 は「話者が権限を持っている義務」であり, have to は「権限が特定の源からやっこない義務」だという。⁽⁹⁾ 即ち上例(a)では must_1 の場合は「話者が帰ることを強制している」のに対し, have to の場合は「用事か何かで止むを得ず帰らなければならない状況下にある」ことを含意しているのである。同様に must_2 と have to には微妙な含意の違いがあり, must_2 は「事實的必然」, have to は「論理的必然」だと Leech は言う。上例(b)では must_2 の場合は「誤りがきつとある」ことを事実に基づいて話者が確信的に推断するのに対し, have to の場合は「論理的に考えて, 反対の可能性はない」と言っている。

(49) (a) Someone must_2 be telling a lie.

(b) Someone has to be telling a lie.

でも(a)は単なる疑惑の表明に過ぎないが, (b)では論理的に考えて誰かが嘘をついている筈だと「非難のひびき」を匂わせている。

尚 have to の否定形 don't have to は, must not と意味的に対応せず, need not と対応している。

既に述べたように must not は命題否定で

(50) (a) You must_1 not come. = I oblige you [**not to come**].

(b) It must₂ not be your fault.

=It is certain [that it is **not** your fault].

のように命題の述語が否定されることになる。ところが don't have to は

(51) (a) You don't have to come. =You are **not** obliged [to come].

(b) It doesn't have to be your fault.

=It is **not** necessary [for it to be your fault].

のように陳述否定であり, have to 自身が否定されている。この事実は, 使用頻度も高い基礎的な学習事項であるだけに, 重要である。

3. be to

俗に be to の意味として 1. 予定 (運命) 2., 義務 (当然) の 2つが挙げられる。前者は will₂ に近い認識的意味と, 後者は ought₁ to に近い本来的意味と, それぞれ対応する。

(52) (a) He $\left\{ \begin{array}{l} \text{is to} \\ \text{will}_2 \end{array} \right\}$ arrive late tonight. [予定]

(b) He $\left\{ \begin{array}{l} \text{is to} \\ \text{ought}_1 \text{ to} \end{array} \right\}$ obey his elders. [義務/当然]

従って be to の学習上の問題点は, この両義の適正な選択を文脈から考えることに尽きる。

4. be going to

この形も「意図」と「未来」を両義として持ち, それぞれ will₁, will₂ と対応している。

(53) (a) I $\left\{ \begin{array}{l} \text{am going to} \\ \text{will}_1 \end{array} \right\}$ paint the wall today. [意図]

(b) We $\left\{ \begin{array}{l} \text{are going to} \\ \text{will}_2 \end{array} \right\}$ meet him at the station. [未来/予測]

この形は will と常に交換可能で, 特に問題点はない。唯時とすると「近い」未来の意味を含意して, will₂ よりも局限された意味になることはある。

(c) We were going to start when he arrived.

5. used to

この語は「過去の習慣」と「(今は存在しない) 過去」との両義がある。

(54) (a) He used to take bath in the morning. [過去の習慣]

(b) He is no longer what he used to be. [過去]

このうち(a)の方は Modal の would₁ (過去の頻発事項) と微差を持って対応している。ただ used to のほうが would より「規則的」に起ったことを示す意味合いが濃い。

(c) He would often take bath in the morning. [過去の頻発事項]
尚(b)の「(今は存在しない)過去」の意味に対応する Modal はない。寧ろ過去時制の意味と対応している。

〈注〉 1~4 の Quasi-modals は Modals と意味的に対応する語だったが、この used to と次の had better は統語的特性の一部を Modals と共有するため、Quasi-modals の仲間入りをしている。【従って 1~4 と 5~6 とでは Modals との関連の糸が異なっている。

6. had better

上記の〈注〉に述べたように、Modals と統語的特性を一部共有するのみで、意味的には何の対応も持たない。強いて言えば may₁ に近く、「～した方がよい」と普通学習される。

(55) (a) You had better start at once. [勧告]

若干押しつけがましい「勧め」であることを学習すればそれでいい。

以上見て来たように、Modals の学習とからみ合うのは be able to と have to ぐらいで、その他のものに関しては、学習上の問題点としては、語い学習の域を余り大きく出ない。ただ be able to, have to は非定形があるので、Modals にはない統語上の自由を持っていることだけは見逃せない。

(56) (a) We may have to start very early.

(b) His being able to speak English helped him greatly.

(a)文では may + must の連続が可能になっており、(b)文では can の名詞化が出来ている。もともと日本語のモデルには、英語の modals に見るような微妙な制約はなく

(57) (a) 我々は早く出発し nakute-wa-ikenai ka-mo-shir-e-nai.

(b) 彼の英語が話 s-eru koto は大いに役立った。

のように自由にモデルの連続(a)も、名詞化(b)も出来る。結局はこの日本語

の高い自由度が、英語の Modals 学習上の最大の干渉となりそうである。

Ⅸ 検 証

以上英語の Modals を学習するに当って、我が国の中・高校生が直面する問題点を、主として日・英両国語のもつ類似と相違に起因する転移ないし干渉の視点から探って来た。そして挙げたいいくつかの予測について、実際の学習の場で検証を試みた。理解学習面では、10問の英文の意味を書かせ、その解答のし方の中に Modals 理解の様相を探り、発表学習面では、やはり10問の日本語を英文化させる中で、問題点に目を凝らせた。対象学生は本学体育学部の入学間もない2クラス86名。中には英語の不得意なものや、職業課程を経て学習量の少ないものも混っていて、結果的には答案の多様性の中に、かえって平均的学習者の実態を鮮明に反映させてくれている。問題は、分析対象分子を浮き彫りにし、他の分子の混入をできる限り防ぐ意味で、空所補充の形式をとった。尚数字は百分率で示してある。

A. 理解学習面

空所を補って次の英文の意味を書きなさい：—

1. She can be ill now. (彼女は今病気.....)

○ かもしれない	24%
? だろう	5
× に違いない	18
× のはずだ	9
× である	42
× になれる	2

「可能性」の意味の can_2 は馴染みが薄いらしく、案外に正解率が低い。42%もの学生が can の存在を無視して「である」と断定してしまった。 $must_2$, $ought_2$ の意味にとったものも多く、文脈に合わせるための苦勞が見られる。流石に can_1 の意味に

はとり難い文脈であったので、2%と少ない。

2. You may not go with them. (あなたは彼らと一しょに.....)

○ 行かなくてもよい	54%
○ 行ってはいけない	20
○ 行かないかもしれない	8
? 行かないだろう	8
× 行かない方がよい	6
× 行かない	4

この文脈では not の強勢の有無によって、Modal 否定にも命題否定にもとれる。その上、一寸おかしいが may_2 にとっても誤りではない。その3つの意味の馴染み度を見る狙いだったが、案の定「てもよい」が一番定着度が高いらしく、通常 $may not$

=must not と考えるべき所を、命題否定 (not に強勢をのせた特殊な場合) の方に訳したものが圧倒的に多かった。may を「てもよい」と機械的に組み合わせた短絡的学習の匂いが濃い。

3. He must be working tomorrow. (彼は明日は.....)

○ 働いているに違いない	17%
× 働いていなければならない	45
× 働くに違いない	18
× 働かなければならない	7
× その他	13

命題の述語が [+state] の場合の must は must₂ の意味解釈しか許されない。この認識は難しく、正答率も予想した通り低い。日本語のモダルに対応事実がない為の干渉と推察できる。尚命題述語の進行相を無視した訳が25%もあった。基本型を一寸外れると、もう躓くような学習の脆弱さを見る。

4. You don't have to come yourself. (君は自分で.....)

○ 来なくてもよい	57%
× 来てはいけない	15
× 来なければならぬ	6
× 来ることはできない	11
× 来るはずがない	3
× その他	4
無 答	4

have to の否定形が must not でなく、need not と同意であるという知識は割合徹底していた。最近の口語米語への馴染みの深さを物語っている。ただ cannot や must と混同したものも多く基礎の脆弱さは蔽えない。

5. He ought not to be serious. (彼は本気.....)

○ であるはずがない	27%
? であるべきでない	16
? でないに違いない	6
× になる必要はない	5
× ではない	13
× その他	14
無 答	19

文脈から考えてこれを ought₁ にとるのは無理だが、誤りとは断じ難い。更に「でないに違いない」とした学生もほんとうには分っていないだろう。真の正解率27%。ought₂ の理解は ought₁ ほど徹底していないに違いない。無答も多く、ought は can, may, must に較べれば

習熟度が低い。

6. She must have been very hungry. (彼はとても.....)

○ 空腹だったに違いない	40%
× 空腹であるに違いない	27
× 空腹だった	20

must₂ に続く完了不定詞の意味を理解していたものの40%。この構文が分らず、have been を無視したものと、逆に must の方を無視したものが、ほぼ半ずつ。何

× その他	12
無 答	1

れにしても Modals の時制の理解は今一歩の感がある。

7. He should have come earlier. (彼はもっと早く.....。)

○ 来るべきだった	56%
× 来るべきだ	25
× 来なければならな いだろう	7
× その他	8
無 答	4

たまたま日本語のモダル「べきだった」が過去の「不実現」事象の当為をも表現しているの、深い認識がなくとも正解の出る可能性があるためか、案外に高い正解率になっている。ただ前問同様 have come の「時」の意味を無視したものが32%も居

て、この構造の理解の難しさを覗かせている。

8. Someone has to be telling a lie. (誰かが嘘を.....。)

○ ついでに答だ	15%
○ ついでに違 ない	30
× ついでに なければ ならない	13
× ついでに かも知 れない	7
× ついでに	14
× その他	7
無 答	14

この has to を正しく must₂ の意味に把握したもの45%はまずまずの成績。must₁ の意味にとることが予想されたのだが、文脈に支えられて割合少なく、13%にとどまった。has to を理解できず、無視したもの14%など、基礎的事項の学習の粗雑さが相変わらず目立つ。

9. We may have to start very early. (我々はとても早く.....。)

○ 出発しなければ ならぬかもしれ ない	24%
○ 出発しなければ ならぬだろう	11
× 出発しなければ ならぬ	19
× 出発するかもしれ ない	5
× 出発してもよい	5
× 出発した方がよい	8
× その他	26
無 答	2

may と have to の意味の合成を理解していたものはほぼ全体の1/3に過ぎず、そのどちらかを無視したものが29%も居た。「その他」の誤答には may の「婉曲性」と have to の「当為」とを漠然と合成した「すべきかもしれない」「すべきだったかも」などが目立った。どうやら意味の合成にもう破綻を見せる程度の軟弱な基盤らしい。

10. Might I stay a little longer? (私はもう少しここに.....。)

○ 居てもいいでしょうか	58%
○ 居たいのですけど	11
× 居てもよかったですか	11
× 居たかも知れなかったのですか	4
× 居ましょうか	5
× その他	7
無 答	4

文脈が明快で紛れがない為か、正答率59%は高い方。ただ might の過去形に牽かれて、命題部分（居た）や Modal 部分（よかった）を過去の意味に解釈したもの15%には所謂「二次的干渉」が見られる。最近会話文に接する度合が高く、「婉曲・丁寧」表現には馴染んでいるのも、正答率の高さを助けているだろう。

B. 発表学習面

空所を補って、次の日本語の意味を英文にしなさい：—

1. あなたは毎日来てもよい。(You _____ every day.)

○ may come	69%
○ can come	2
× have to come	6
× must come	4
× may to come	6
× その他	12
無 答	1

本来の意味の can₁, may₁, must₁は中学校段階から最も馴染んだ助動詞であるから、高い正解率は当然で、むしろ29%の誤答率の方が気になる。may と must, have to の混同, may to come, may coming, may have to come, can coming などの散見は、この基礎とも言うべき段階で、

既に確実さを欠いている¹⁾³の学生の存在を明示していて、大学教育に携わる者の胸に寒むぎむと訴えてくる。

2. 我々はすぐ出発しなければならない。(We _____ at once.)

○ must start	46%
○ have to start	25
? may have to start	8
? must be starting	3
× must to start	5
× その他	9
無 答	4

前問とほぼ同じ結果が出たのは当然。ただ must と have to のどちらに馴染みが深いかを見る狙いもあったが、結果は予想以上に have to が出た。相変わらず must to start, must have start, must be start などの基礎的な誤りが散見される。主語を3単現にしたら、musts start, must

starts なども見られたかも知れない。

3. 彼女は病気かも知れないのですか。(_____ ill now?)

○ Can she be	19%
× May she be	28
× Does she may be	4
× Must she be	2

may₂ が疑問形に馴染まず、can₂ が代用される知識は比較的高度なもので、19%の正解は寧ろ好成績である。ただ疑問形となると、素直に May she be...? の形が出

× Doesn't she have to be	3
× May be she	5
× その他	19
無 答	20

て来ないものも多く、多様な誤りに陥ってしまう。中でも Does の出沒、語順の混乱 have to, ought to の使用などが目立った。

4. 君は今日学校へ行かなくてもよい。(You _____ to school today.)

○ need not go	6%
○ don't have to go	24
○ have not to go	3
○? may not go	38
× must not go	10
× may not to go	5
× その他	11
無 答	3

最近の教室では need not よりも don't have to の方が馴染まれているらしい。may not go の38%は not に強勢があれば正しいが、may not は寧ろ must not の意味に用いられる方が自然であり、学生にこの知識があったかどうか怪しい。どうやら安直に命題述語の否定に索かれて may のあとへ not を入れたに過ぎないよ

うだ。誤答には相変わらず、助動詞構文の乱れが目立つ。

5. 君は自分でそれをすべきだ。(You _____ it yourself.)

○ should do	42%
○ ought to do	11
× must do	7
× have to do	8
× should to do	3
× should have done	5
× その他	14
無 答	10

「当為」の Modals の正しい理解はちょうど半数。「義務」の Modals との混同はまだしも、should to do に見られる根強い連鎖構文への類推、should have done に見られる高次の知識の二次干渉など、何れも記憶の不確かさから来る混乱が痛々しい。

6. 彼はもう寝たかも知れない。(She _____ now.)

○ may have gone to bed	7%
? may be sleeping	9
× may have been asleep	4
× must go to bed	4
× might sleep	9
× might have slept	4
× may go to bed	21
× ought to be sleeping	2
× その他	26
無 答	14

完了不定詞の続く Modals の発表はやはり難かしく、正解は僅かに7%。単純に may go to bed としたものは21%に及んだ。その他は might sleep, might have slept と may の過去形に頼ったものはまだしも、ought to sleep, should be sleeping, must have to sleep, would be sleeping, etc. と千差万別の迷いを見せた。日本語に類似構文のないための干渉が明瞭に伺える。

7. その日彼は病気だったはずがない。(He _____ ill that day.)

○ cannot have been	4%
× ought not to have been	6
× must not have been	9
× may not have been	2
× ought not to be	13
× cannot be	14
× could not be	6
× その他	24
無 答	22

前問と同じ狙いの問題だが、前問より馴染みの薄い構文だから、混乱は一層甚しく、無答も多い。それでも have been を想起したもの17%は今一步だが、これを無視した14%、can の方を過去形にした6%は、この構文の認識に欠けている。「その他」の誤答の内容も千差万別で did not have to be, should not have been, could have not been など苦心惨憺ぶりが伺える。

8. 明日雨が降れば私は出掛けません。(I won't go out if _____ tomorrow.)

○ it rains	9%
○ it is rainy	3
○ it should rain	3
× it is rain	5
× it will rain	14
× it will be rain	15
× その他	32
無 答	19

「雨が降る」を It is rain. とする問題点以前の誤りが混入して、統計結果をぼけさせてしまったが、それを含めても、if 節に現在形を用いたものは20%にすぎない。予想通り will を用いたもの29%。「その他の誤答」の中には would(10%), should(5%), were to(5%) などを用いたものが目立っていた。無答の多いのは

複文のせい。一寸長い日本文には始めから諦めてかかる学習姿勢が気になる。

9. 一ヶ月もしたら君は泳げるだろう。(You _____ in a month or so.)

○ will be able to swim	30%
× will swim	6
× will be swimming	7
× must be swimming	3
× will can	5
× may can	3
× その他	34
無 答	12

所謂「Modals の複合形」が表現できるかを見る狙い。誤答の殆どが be able to を想起できなかった (are able to とした3%を除いて、67%が)。can will, will can, may will, may can, will may の他に will could, ought to can, must will, should may と Modals を単純に重ねたもの21%は Modals の基礎的知識の脆弱さを如実に物語っていると

時に、日本語のモデルが重ね得ることから来る短絡的干渉が明らかであろう。

10. 私は速く走ったのでバスに乗れました。(I ran fast so I _____ the bus.)

○ was able to catch	3%
○ was in time for	3
? could catch	42
× can catch	7
× caught	5
× could have caught	2
× その他	24
無 答	14

「成就」を表わす過去形の *could* を非文とする (Jenkins) 知識を学生に期待するのはやはり無理のようである。ただ一部のアメリカ人が適格文と認めているのに甘えても、正解が半数に充たないのはやはり複文の険しい形相のせいだ。現在形 *can* で済ませている 7% は情けないが、*might catch, could have caught, had caught,*

could to catch など多様に踏み迷う。理解学習面なら余りにも簡単な *can*→*could* さえ、発表学習面ではさまざまに躓いて正確が期し難い。

以上検証の結果は、予見した問題点をほぼ全的に裏付けている。中でも顕著に露呈された点に次のようなものがある。

1. Modals の持つ意味の学習が、日本語のモダルとの単純な翻訳関係で行われて居り、Modals₁ と Modals₂ がたまたま日本語では別語が対応するため、相互に連関を欠き、統一的な理解がない。従って発表学習面では、*can, may, must* のような基礎的な Modals でも、相互の混同が顕著に見られる。

2. Modals の否定形が一つの *not* しか持たず、時には命題述語を、時には Modals 自身をその否定の作用域に持つが、日本語には 2 つの否定辞が明確に否定の作用域を分ち持つため、その干渉に起因する混乱が起る。学生は明確な認識もなく、単純に文脈から想像して *not* の作用域を決定しているようである。

3. 「時」に係わる Modals の特殊な語形変化は、日本語のモダルが明快なため、理解が難しく、特に発表学習面では混乱を極める。

4. Modals の持つ用法上の各種の制約は、日本語のモダルにはないため、十全の理解は至難らしく、殆どが無視される傾向にある。

5. 2 つの Modals が連なる形態は英語には無く、どちらか一方が Pseudo-modals の形をとる。日本語では自由にモダルを連ねることができるので、*may can, will must* などの誤文が続出した。

6. 過去形の Modals には、形態の欠けたものや、時の一致による間接的な過去形、叙想法過去形や、「婉曲・丁寧」の過去形とさまざまな意味が含まれていて、これらの記憶の破片が学生の頭にはボロボロに存在し、

特に一寸難しそうな文脈の日本語モダルの英文化には、やたらに過去形の Modals をふり廻す傾向がある。

7. 「Modal+V」の基本的な形態でも、日本語のモダルが連鎖動詞的性格であるため、一寸複雑になると、もうこの基本形態の発表が崩れてしまう。

8. 面白いことには、should, ought to を高次元の Modals として捉えているためか、難しそうな日本語のモダルの英文化には、過去形の Modals (could, might) と共にやたらに should, ought to が飛び出してくる。

9. 出題のポイントは簡単なことでも、複文などのように表面的面構えが難しそうだ、もう逃げ腰になる学習姿勢が目立ち、脆弱な基礎知識と共に、英語教育上の重大な問題と言わざるを得ない。

何れにせよ英語の Modals は、統語的には他国語に見られない独自の複雑さを抱えており、意味的にも両義性の曖昧さを秘め、日本語のモダルとは単に意味的対応を持つに過ぎない。従って日本語のモダルの明快な連鎖動詞性に馴れた日本人学生には、Modals の統語上、意味上の複雑さは、想像以上に学習困難度を高くしている。翻訳的対照学習を越えて、Modals 自体の統一的理解へ学生の眼を開かせる必要がある。この検討の成果を踏えて、将来何らかのよりよい具体的教育方策を実らせたいものである。

〈注〉

- (1) 井上和子 (1967) : A Study of Japanese Syntax (Mouton) pp. 28~29.
- (2) F. R. Palmer (1965) : A Linguistic Study of the English Verb (大修館) p. 55
- (3) Ibid.
- (4) 荒木一雄 et al (1977) : 助動詞 (大修館) p. 347
- (5) Ibid.
- (6) op. cit. p. 431 (quoted from L. Jenkins (1972) : Modality in English Syntax)
- (7) G. N. Leech (1971) : Meaning and the English Verb (大修館) p. 147
- (8) op. cit. p. 189
- (9) op. cit. p. 115

〈その他の参考文献〉

- N. Chomsky (1965) : Aspects of the Theory of Syntax
- J. R. Ross (1967c) : Auxiliaries as Main Verbs
- 中右 実 (1973) : 日本語補文構造論
- 時枝誠記 (1950) : 日本文法 (口語篇)
- R. Lado (1957) : Linguistics Across Cultures